

平成23年度 第20回エッセンシャル研修会

1. 期日 平成23年7月29日（金）9：30～16：00
2. 会場 会館とどろき けやきの間
3. 参加者 午前 93名 午後 77名

午前 『ありのままの子どもを受け入れる』

あきらめない、あせらない、あまやかさないの3つの愛で・・・

講師 オペラ歌手・洗足学園音楽大学講師

夢はるかファミリー（障がい児のための音楽教室）」主宰

一政 さつき 氏



《前半》

講師紹介のためのVTR鑑賞

2010年2月 BS-TBS放映『女子才彩』ゲスト出演より

オペラ歌手、一政さつきさん。洗足学園音楽大学で声楽の指導者としても、多忙をきわめる一政さんは、障がいをもった子どもたちのための『夢はるか音楽教室』の代表も努めています。この音楽教室で一政さんは子どもたちと一緒に音楽を楽しみ、年に一度『夢はるかフェスティバル』を開催し、元気いっぱいの歌声が会場に響きわたります。そんな一政さんの奮闘振りを紹介したVTRを鑑賞しました。

講話

一政さんの長女、春花さん

一政さんの長女春花さんは、平成8年6月7日に誕生しました。医師に「あなたのお子さんは障がいを持っています、ダウン症です。」と言われ、具体的にどんなことか聞いた一政さんに「知恵遅れです。」と答えた医師の言葉は、人生の中で忘れられない言葉だったそうです。それでも無意識に「大丈夫、大丈夫、この子は天使のような子だから、天使のように育てるから。」と言葉にしたそうです。見通しがきかないことをどうして言ってしまったのかと思った一政さんですが、春花さんを抱いた瞬間『守らなくてはい』と思い、そこから人生がどんどん広がり、オペラ歌手の自分が、春花さんのおかげでいい方向に向かったと話されました。

一政さんは、交流を広げたいという夢をもって、春花さんを公立中学に入学させましたが大きな壁がありました。一年の部活動の体験入部の時です。春花さんは、30分くらいの正座に耐えられず床にねそべってしまい、自己紹介でも顔を伏せて固まってしまいました。三者面談で先生に「あれはどういうことですか？」と聞かれ、恥ずかしいから名前が言えないとどうし

てわからないのか、先生や友達フォローしてくださらないのかなどと甘い考えでいたそうです。世の中には、うまく言葉で説明できない障がい児の気持ちをくみ取ってくれる大人が少ないと感じた一政さん。一政さんは『相手の気持ちをくみ取りたいとか、くみとってあげようという優しい気持ちがまず教育現場に必要で、先生方が心を開かないと、子どもたちは心を開かない』と感じています。また、いくつになっても相手の言っている言葉のメッセージ、その人の顔色や何が言いたかったんだろうと、毎日アンテナを張って職場に行かないと、子どものメッセージは受け取れないと話し、『メッセージを受け取れるクリアな自分でありたい』と思っていると話してくださいました。

夢はるか音楽教室

春花さんと同じ障がいを持つお母さんたちと仲良くなり、障がいを持つ子どもにきちんとした音楽を教えて欲しいと言われ、春花さんが4歳の時から足掛け12年、自分にできることはそれしかないと思い、一政さんは音楽教室に取り組みました。その音楽教室は『夢はるか音楽教室』と名付けられ、子どもたちと音楽を楽しんでいます。

一政さんは以前、いろいろな音楽療法の講座を受けたり、必死に勉強した時期がありました。ある時、お世話になっている障がい児のタイムケアの先生に「音楽療法という言葉は嫌いだから、音楽を手段に使わないで欲しい。音楽は健常者も障がい者も誰でも楽しんでそこに隔たりはないと思う。」と言われた時、『求めていたのはこれだ。』と気がつきました。また、春花さんに障がいがなく、自分が音楽教室を開いていなかったら、電車で自閉症の子どもが一人で話しているのを見たら、怖くて違う車両に乗っていたと思ったそうです。それは、そういう子どもの特徴を知らなかったからと言い、特徴を知り、何がしたいのか、何に興味があるのか知りさえすれば世の中がうまく周るのではないかと話されました。

「病気や障がいを持っているのは個性。障がいは一生治らない。ではどうしていくのかというと、周りの人が理解することです。そういう子どもと話をしたり遊んでみたりすることです。音楽教室をやりながらいろんな生徒さんと関わりを持ちつつ、その子どもたちが出すメッセージを落としていかに心がかきたいと思っています。これからも子どもの笑顔から笑顔をもらい、自分自身も子どもに笑顔を送りたいと思っています」と、最後に話してくださいました。

前半の最後には、会場にいる皆さんと一緒に『少年時代』と『夏の思い出』の2曲を歌いました。



《後半》

コンサート

『神様からの贈りもの』 ～ママ待っててね～

歌い語り 一政 さつき 氏 伴奏 八木 敦子 さん



春花さんが保育園に通っていた頃のことです。一政さんは担任の先生から、クラスの子どもたちとそのお母さんたちに、春花さんが生まれた日のことを春花さんのお誕生日に話しに来て欲しいと言われました。それをきっかけに、小さな子どもたちにもいろいろな子どもがいるということをわかってもらえるように、春花さんの6歳のお誕生日の前日に一晩で書き上げた物語が、『神様からの贈りもの』です。

この物語は主人公、春ちゃんが神様の国から人間の国のママを助けるために、(神の国の決まりを破れば、障がいをもって生まれるのを覚悟で)、一か月早く人間の国へ降りてゆく列車に飛び乗るというストーリーです。なぜ我が娘がダウン症という障がいをもって生まれてきたのか、作者一政さつきさんが想像した天のメッセージを「歌」と「お話し」で温かく綴った愛と感動の物語です。『七つの子』や『世界にひとつだけの花』など歌を交えながらの歌い語りでは、会場に素敵な歌声が響きました。

物語の最後には次のような語りがありました。

「世の中にはいろいろな人がいます。目で見えてわかる病気の人がいれば、見ただけではわからない病気の人もあります。元気そうな人もそうでない人も、お互い何を言いたいのか、何をしたいのかわかってあげたいという優しい気持ちをみんながいつも持っていたら、みんな仲良く暮らしていけるはずです。神様は、優しい人、勇気ある人、がんばる人には素敵な笑顔をプレゼントしてくれます。」

一政さんの語りには、多くの人が涙を流しながら聞いていました。



終わりに

一政さんは、「障がいとは不便な時もあるけれど、不幸なことではないのです。それによって、とても大切なことが見えてくるのです。障がいという高い山から見た世界は、何て色鮮やかで、何て深い景色なんだろうと私は自分の運命に喜びを感じます。まだまだ本当の意味でのバリアフリーは難しい社会です。バリアフリーとは、お互いの間に壁がないこと、相手のことを理解しようとする温かい気持ちではないでしょうか。」と、会場にいる皆さんに投げかけ研修会は終了しました。